

2001年
7月発行

no. 51

特集

友だちを撮影して 発見したこと

授業で取り組んだ「高校生の生活 フォトメッセージコンテスト」

TJF主催の「高校生の生活フォトメッセージコンテスト」に寄せられた高校生のメッセージを読むと、身近な友だちを主人公にして写真を撮る過程で、友だちに対する理解を深めるとともに、人のかかわりや自らの生き方について考え、それを自分のことばで表現しようとしている高校生の姿がうかがえます。

昨年度の第4回コンテストに際しては、コンテストのこうした教育的な意義に着目し、国際理解、美術、英語などの授業の一環として作品づくりに取り組んだ高校が増えました。

今回の特集では、各教科の教師がどのようにコンテストを位置付け、授業に取り組んだのか、その実践例を紹介し、作品制作を通じて生徒が何を学び、考えたのかを報告するとともに、2002年度から本格的に始まる総合的な学習の時間での取り組みも考慮して、今後の課題と展望を探ります。



シリーズ

ことばは楽しい ⑧ p.8
広東語

見る聞く考えるやってみる授業 ⑩ p.10
人間科 自分さがしの旅

素顔の高校生 ⑧ p.16
友だちの輝きをつけて、
自分も輝けるのです。

TJFの事業 p.12
「漢語話者のためのわかりやすい
日本語シリーズ」 中国中高校日本語教師
研修会オリジナル教材の刊行

韓国朝鮮語・中国語の教員免許取得
をめぐる

事業報告 (2001年4・5・6月)

TJFネットだより p.15

日本の高校生の日常をとらえ 海外の生徒に伝えてほしい



大阪学芸高等学校教諭(英語科)
石本象二

科目: 国際理解
対象: 2年生2クラス(76名)
授業時間: 3週間にわたり合計5時間

ねらい カナダの生徒との交流を踏まえて自分たちを紹介する

大阪学芸高等学校では4年前に国際科のコースを設け、国際社会に広く貢献できる人材の育成を目標に、さまざまなプログラムを実施しています。第2外国語(中国語・ドイツ語)や国際理解は国際コースの必修科目です。国際理解の授業では、1年生は近隣の国に対する理解を深めるために、グループでアジア諸国の文化研究に取り組み、2年生はカナダでの語学研修の準備として英会話を学ぶとともに、外国人問題を含めた裁判の傍聴を通じ、人権に関する知識などを深めました。昨年の語学研修は、6月末から約1ヵ月にわたり、国際コース2年生全員、約80名がカナダのエドモントンに滞在しました。ホームステイをしながら、午前中はコミュニティーカレッジで英語の授業を受け、午後は名所を見学したり、ボランティア活動に参加するなど、有意義な体験をしました。帰国後もホストファミリーと手紙やメールを通じて交流を続けている生徒や、留学を選択肢の一つとして大学進学を考えている生徒もあり、研修に参加して自らの視野を広げたように感じられます。

私の国際理解の授業でコンテストの作品づくりに取り組んだのは語学研修の後でしたが、生徒は過去の応募作品が海外の日本語教科書に掲載されたことを知り、関心を示したようです。カナダで通ったコミュニティーカレッジでは現地の生徒と接する機会もあり、外国人のたたちの日本理解に役立つよう、自分たちの撮った写真とメッセージで、何とか日本の高校生の実情を紹介しようとして取り組んでくれたように思います。

授業 生徒の自主的な作品づくりを促す

作品制作は、3週間にわたり計5時間ほどかけて行いました。1週目はコンテストの内容の説明と写真集『過去のコンテストの作品集『伝えたい私たちの素顔 The Way We Are』』を紹介し、5人ずつグループに分けてそれぞれに1台ずつ使いきりカメラを渡しました。自分のカメラを使用した生徒は少なく、大半は1台の使いきりカメラを数人で使用したので、撮影の日取りの調整が必要でした。また、特定の生徒だけを主人公にしないよう注意を促しました。2週目は、終わった生徒から順次、写真選びをさせるとともに応募用紙にメッセージの下書きをさせ、3週目はその清書にあてました。写真集のユニークな作品を見せることで、生徒の意欲を引き出すことができたようです。主

人公やテーマの決定、撮影などはほとんど生徒の自主性にまかせ、生徒が話し合いながらアイデアをまとめていくよう、授業中に話し合いの時間をとるなど配慮しました。早く完成した作品は教卓などに並べ、生徒同士が鑑賞・批評する機会を設けました。

課題 全員参加の難しさを実感する

生徒はおおむね楽しく取り組んでいたようです。しかし中には写真に関心がなく、深く考えずに撮影する生徒もあり、全員を強制的に参加させることの難しさを感じました。作品づくりを通じて日本の高校生の日常の姿をとらえ、それを海外の生徒に伝えてほしい、そうした具体的な目標があれば意欲を持って取り組んでくれるのではないかと考え、国際理解の授業の一環としてコンテストを位置付けたのですが、全員にそのことを納得させるのに苦労しました。また学校だけでなく、家や放課後などさまざまな場での主人公の姿を写すように指導し、教師として学校の外での生徒の姿を知りたいと期待もしたのですが、実際には制服姿の写真が多く、私生活はなかなか出てきませんでした。もう少し早くから取り組み、いったん作品を発表させて生徒に評価させた後、撮り直して仕上げさせれば、より良い作品になったのではないかと思います。

本コンテストの参加にあたっては、福原一恵大阪学芸高等学校教諭(参加当時)の協力を得ました。

「高校生の生活フォトメッセージコンテスト」の趣旨と 第5回の作品募集

「高校生の生活フォトメッセージコンテスト」は、日本の高校生が何を考え、どんな毎日を送っているのかを、高校生自身が写した5枚の組写真と文章(メッセージ)で、海外の同世代の若者に伝えてもらおうとの趣旨で開催されています。身近な友だちの暮らしや個性をカメラのレンズを通して見つめなおしてもらい、その過程で気づいたこと、感じたこと、作品を通じて伝えたいことを、自分のことばでメッセージとして表現してもらうものです。TJFでは、これらの写真やメッセージを、写真集やホームページを通じて海外で日本語を学ぶ生徒や教育関係者に届けています。

ただいま第5回コンテストの作品を募集中です。「友だちの素顔」をテーマに、一人の高校生を主人公にした5枚の写真とメッセージをお送りください。授業の一環としてコンテストに参加された学校には、学校賞(賞状と盾)を贈呈します。ご希望の方には募集要項と応募用紙をお送りしますので、TJFフォトメッセージコンテスト係までご連絡ください。たくさんのご応募をお待ちしています。

写真を使って表現する 英会話の授業

大阪府立松原高等学校教諭(英語科)

山田正人



科目: 英会話
対象: 3年生2クラス(21名)
授業時間: 5週間にわたり毎週2時間

ねらい 本心に伝えたいことを英語で表現してもらおう

英会話の授業中、ペアによるパターンプラクティスで、生徒に学習意欲をもたせるのは難しいものです。パターンプラクティスで型通りの文を言わせるのではなく、生徒たちが本心に伝えたいことを英語で表現してもらおう、伝えたいこととは何なのか、と考えていたときにこのコンテストのことを知り、取り組んでみようと思いました。TJFのホームページで海外の生徒の様子もよくわかりましたし、英語で海外の高校生に自分たちの姿を伝えてもらえるなら、生徒の興味もわくのではないかと、できればインターネットを使い実際の交流にもつなげていければ、と考えたのです。

普段の授業ではNET(Native English Teacher)は英語以外話しませんし、私も極力英語で通します。活動の中心はペア・ワークです。NETもしくは私のスピーチを聞き取らせ、内容についてQ&Aをした後で、ペアごとに交代で質問と返答の練習を繰り返させます。わからない表現は教師に質問させ、有用な表現は黒板に書いて次回のクイズに出題します。クラスにいる留学生にも自国のことや日本での体験などを語ってもらい、毎回違うスピーチを聴かせています。ときどき生徒に写真などを持参してもらい、それについて語らせる方法も取り入れています。例えば、「あなたの人生で大切な瞬間について考えなさい」「関連した写真や絵や品物を三、四点持ってきなさい」「それを用いて大切な瞬間について語りなさい」という課題で、それぞれの場面について英語でスピーチをさせ、質疑応答の後ペア・ワークをします。

授業 質疑応答を通じて伝えたいことを具体化させる

こうした普段の授業を踏まえて、2学期後半にコンテストの作品づくりに取りかかりました。授業の流れは次の通りです。

- ①応募作品制作が2学期後半の授業内容であることを説明。TJF提供のビデオ 第3回コンテストに応募した大阪の高校生の作品制作過程を取材したNHKテレビ番組のビデオを視聴。
- ②作品制作用紙(右段下参照)とフィルムないしはインスタントカメラを配布し、作品制作を指示。写真のキャプションは英語で記入(応募用紙は日本語で記入)。
- ③制作がなかなか進まないため、前年の優秀作品から好きな写真を選ばせ、なぜ好きなのか、何をしているところか説明させて、Q&Aをした。友人のどんな姿を写真に撮ればよいかわからないという

生徒には、5コマ漫画を描かせ、ペアでストーリーを話し合わせた。

- ④完成作品を、一人10分ずつ発表。
- ⑤質問用紙を配布して質問を準備させ、多く質問した生徒の評価を高めた。

質問は写真によって異なりますが、“What is she doing?” “Why is she making your sweater?” “What does she do after school?” “Is she good at playing the piano?” “What topic do you usually talk with her?” などです。期末考査の代わりに行うNETのインタビューテストも、生徒の写真を見ながら行いました。

課題 明確な意図を持って撮影に臨めるよう工夫する

問題点としては次のような点がありました。

- ①アルバイトをしている生徒が多く、撮影や授業が予定通りに進まなかった。
- ②インスタントカメラの使用がほとんどで、大写しのショットが多く、写真の出来栄も優れたものが少なかった。明確な意図を持って撮影する姿勢を持たせなかった。
- ③友人の背景や内面に迫る内容のコメントが少なかった。
- ④作品を生徒同士で評価させたかったが、時間がなく全員の作品を披露することができなかった。
- ⑤全員分のキャプションをNETがチェックできなかった。

今回は以上のことを考慮に入れ、授業の前半に「友だちについて語るスピーチコーナー」を設けたり、過去の作品を英訳したものの中から良いサンプルを選んでQ&Aを試す機会を多くし、質の向上を目指したいと思います。

Picture Story Project 3 English Conversation III

1. Think of an important person in your life.
2. Bring 5 pictures of the person.
3. Tell about the person using pictures.

What is your title of the story?
What pictures will you use in the story?

1	_____	4	_____
	_____		_____
2	_____	5	_____
	_____		_____
3	_____		_____
	_____		_____

授業で用いた作品制作用紙。

自分の置かれている立場、 自分のアイデンティティを考える



福岡インターナショナルスクール教諭(日本語科)
宮脇律子

科目: Japanese
対象: 9～12年生1クラス15名
授業時間: 9月から12月にかけて合計6時間

ねらい 生徒に自信と誇りを持ってもらう

福岡インターナショナルスクール(FIS)の日本語上級クラス Japanese IVでは、生徒たちに自信と誇りを身につけてもらおうと、このコンテストを活用しています。目標は日本語で考え、表現すること。テーマは、「自分たちの立場、自分のアイデンティティを考える」(日本にあるISの生徒として)。これは、生徒が自信と誇りを持ち、さらに国際的な世界へと強く飛び立っていけるように、卒業までにぜひ一度は考えてほしいテーマなのです。FISの生徒たちは、視野が広い半面、曖昧なところがあります。それは言語や文化習慣などの中途半端さに起因します。休み時間にはさまざまな言語が飛び交い、文字通り多国籍の集団です。ハーフ(bicultural)もいます。英語、日本語、その上両親の国の言語・文化も習得しなければなりません。当然消化不良を起こし、弱さも秘めています。幼稚園から高校まで160人が家族的な雰囲気の中で学び、自称「温室育ち」のFISの生徒たちにとって、自分の立場に気づき、強さを養う機会となるようお願い、コンテストに取り組んでいます。

授業 話し合いで得たヒントをもとにテーマを絞り込ませる

9月初旬 制作開始準備(80分授業2回)。
1時間目 コンテストの募集要項に目を通し、参加意識を高める。過去の入賞作品の鑑賞。「作品づくりのヒント」(コンテスト参加者用の資料)などを自由に読む。
TJFの紹介。私の米国での日本語教育の経験談を含め、米国の高校の日本語学習者の姿勢を伝える。「作品完成までのステップ」(添付①)で日程確認。
2時間目 自分たちの立場、アイデンティティについての話し合い。質問(添付②)に答える形で友人と話し合いながら自分の考えを書く。採点はせず提出のみ。
制作のアイデア交換、主人公選び。自由な話し合い。自然にグループを構成。変更も自由。

クラス内で主人公を選ぶ場合が多く、趣味、俳優、本、映画、将来、悩みなどについて話し込む。冗談を交え、FISの生徒だからこそ出てくる話題などで盛り上がる。それも制作のヒントになる。制作開始後、主人公とテーマの報告(添付③)を義務付ける。変更も報告。テーマは、話し合いが進むにつれしっかりしたものになる。た

とえば「FISに通う主人公」から、「将来を見つめる主人公」へ。
11月20・22日 中間報告会。写真を使いテーマ、メッセージなどを発表。他の生徒からの意見、アイデアを制作につなげる(添付④)。

報告会で取り組みの甘さに気付く生徒や、テーマを新たにしている生徒が現れ、効果大きい。生徒のアドバイス例としては、主人公の特徴が何かわからない、写真の場面にインパクトがない、メッセージ次第で写真も生きる、テーマを絞りもつと掘り下げる必要がある、主人公の優しさが窺えるが、訴えるものに欠ける、など。

12月13・15日 作品発表会、作品提出(生徒同士の温かい拍手)。
1月 校内掲示。カラーコピーした全員の作品(キャプション付)を模造紙に並べ、思い思いのこぼれ話を落書き調にして掲示。英語で書くことで、日本語のわからない生徒へも伝えることができた。

課題 自分を知り友人を知ることで自分たちの立場に気づく

話し合いを深め、制作を進めるにつれ、生徒たちからこんな声があがりました。「日本にいる高校生でも、こんな高校生がいるんだ」ということを強調したい。自分を知ることで友人を見ることができる。逆に、友人を見つめることで自分たちの立場に気づく。これが、このコンテストの隠されたテーマでもあると思います。

Photo Message Contest		Japanese IV
作品完成までのステップ		
主人公を決める	主人公カードに記入	報告
制作開始		
探る!	Use your intuition!	主人公のどんな所に魅力があるのか、主人公の特徴は何か。
そのためには、	話す! どんどん話す! いくらでも話す!	会話を楽しみながら、主人公の魅力をキャッチ! 主人公を見つめて(ストーリーはだめよ)どんな写真が撮れるか追求しよう!
テーマを決める	主人公カードに記入	報告
(主人公用の応募用紙は、時間を見て早めをお願いしておこう。)		
中間報告:	11月20日、22日(月、水)	写真数枚使い、テーマ、伝えたいこと(困っていることもOK)を報告。協力相談会。質問、相談、討論、皆で盛り上げあう会。作品完成への参考となるアドバイスをたくさんもらおう!!!
応募用紙(撮影者用、主人公用)を仕上げる。		
作品発表会:	12月13日、15日(水、金)	発表後提出 作品をタイトル、テーマ、キャプションはもちろん、苦労したところ、ハプニング、また、創作からの感想等をふまえて発表。発表後提出。

①

1. インターナショナルスクールって何？
日本社会内に置かれているインターナショナルスクールとは？
2. なぜ、インターナショナルスクールで学んでいるの？
3. あなたの目に映っている日本人の高校生とは？
4. インターナショナルスクールの生徒の一人として、自分はどんな個性の持主？
その個性は、どんなところで発揮される？(生かされる？)
5. 今の、自分の置かれた立場って何だろう？
これからの自分の社会における立場って何だろう？
6. 自分のアイデンティティって何だろう？

Photo Message Contest 主人公カード 名前

主人公:

テーマ:

3

Photo Message Contest 中間報告 Japanese IV

報告者: 主人公:

テーマ:

アドバイス:

名前

4

このほか授業でコンテストに取り組んだ教師たち

岡山県立玉野高等学校教諭 三宅典子(国語科)

科目	現代文
対象	1年生 8クラス 297名
取り組み方	夏休み中の宿題
位置づけ	玉野高校には国際科があり、「自己理解」「他者理解」は教育の大切な柱。「おいしいちゃん、おばあちゃんへのインタビュー」という課題とともに、コンテストの作品制作を夏休みの課題とした。学内で選考して応募。
今後の課題	事前の説明を丁寧にしておくべきだった。一日でいろいろな写真を撮ってしまおうとしたものが多く残念。

岐阜県立大垣桜高等学校教諭 河合成子(家庭科)

科目	ホームルーム活動
対象	3年生 3クラス 30名
取り組み方	コンテストの趣旨を説明した後ビデオ ^{注1} を見せ、希望者に計画書を作成させる。撮影後に応募用紙に記入させる。
位置づけ	友人をみつめ、互いに同じ時期に同じ課題に取り組むことで、さらに友情を深め、友人を理解する機会とした。本校には「生活文化科」「服飾デザイン科」「福祉科」「食物科」の4科があるが、科の枠を超えた活動ができた。
今後の課題	もう少し早い時期に取り組めばよかった。

愛知県立守山高等学校教諭 瀬治山みどり(家庭科)^{注2}

科目	ライフスキル(学校設定科目)
対象	3年生 3クラス 92名
取り組み方	12月初旬の授業で趣旨説明を行った後、ビデオ ^{注1} と写真集 ^{注3} を見せ、参加希望を募る。校内締め切り日を連絡し、カメラの使用順を決定。冬休み直前の2回目の授業で作品を提出させる。
位置づけ	ライフスキルの「他者理解スキル」の中の「国際理解」として、外国の高校生に日本の高校生の姿を紹介しよう、そのためにまず自分自身のあり方・生き方を考えてみよう ^{注2} と指導した。

今後の課題 年間指導計画の中に位置づけて、指導案やマニュアルを作成し、早い時期から取り組みたい。

東京都立工芸高等学校教諭 相曾貴宏(グラフィックアート科)

科目	グラフィックアート
対象	1、2、3年生 3クラス 120名の中の希望者
取り組み方	夏休みの課題として、学内で提示した複数のコンテストの中から生徒に選択させる。
位置づけ	コミュニケーションの手段としてのグラフィックについて日頃から学習しており、その一つの手段として写真についても取り組んでいる。コンテストは自分の作品の発表の場。入賞することにより、その他の授業も含め、生徒の意欲が増す。

正則高等学校 東京都 講師 土屋純一(美術科)

科目	選択美術 現代芸術入門
対象	2年生 1クラス 28名
取り組み方	9月の授業(2時間)で写真やコンテストの内容、留意点を説明。使いきりカメラを配布し、写真集 ^{注3} とビデオ ^{注1} を見せ、主人公を決定させる。9月から11月にかけて撮影させ、11月にカメラを回収し、現像。11月の授業(2時間)で応募用紙の作成(5枚の写真の選択方法と並べ方、撮影意図やキャプションの応募用紙への記入方法)について説明、相互鑑賞を行う。
位置づけ	「高校生の生活」という身近なテーマで撮影させ、学校の外や海外へもメッセージを発信できるのが魅力。写真を撮ることを通じて、身近な友人から発見したこと、感じたことを大切にしたい。
今後の課題	組写真の制作は事前に頭で考えるだけでは無理で、実際に撮影の作業をすることが必要だが、フィルム代や現像費などの費用がネック。

注1：p.3左段、下から8行目参照。
注2：所属校はコンテスト応募当時のもの。
注3：p.2左段、下から9行目参照。

一人の人物を撮るには、 その人の内面まで知る必要がある。 その人を知るいい機会になる。 撮影って大変な作業だ!

◎ 撮影者



◎ 清原愛 (岡山県立玉野高等学校)

カメラのファインダーから見る彼女の顔は普段とはまったく違って見えた。友だちといるときには友だちとしての顔、いつも明るく笑っている。合唱団にいるときはキリッとしたお姉さんの顔で、笑顔もどことなく大人びている。撮影を通じて新しい一面を発見できたことはとても楽しかった。彼女のことをもっとよく知りたい。だから私は一歩歩み寄る。そうしてもっと彼女と仲良くなれたと思う。



◎ 川端ちなつ (大阪府立松原高等学校)

近頃コギャルと呼ばれている子たちが世間で目立ち、テレビに取り上げられて、大人たちから「最近の女子高生は……」と批判されている。そういう女子高生だけでなく、しっかり真面目に一日一日を過ごしている人がほとんどだということを、大人たちに忘れないでほしい。



◎ 金長恵 (福岡インターナショナルスクール)

僕は韓国人だけど、日本に長く住み、インターナショナルスクールでアメリカの教育を受けている。結構矛盾した存在だ。そして「僕とはどんな人間だろうか」と自分に問いかけてみる。僕と似た環境にいるユジンの日常と素顔をクローズアップすることによって、カメラのこっち側にいる自分の姿も客観的に撮ることができたのかも知れない。



◎ 印牧真理 (東京都立工芸高等学校)

趣味でもバイトでも学校のことでもいつでも楽しそうで、自分で「毎日充実している」と言いきる彼女には、高校生らしいパワーを感じる。いつも近くにいる友だちだけど、改めて彼女を見てうらやましくなってしまった。



◎ 山田真梨子(大阪学芸高等学校)

私は高校生活の半分以上を過ごしてきて思います。あやちゃん笑顔と優しさにだけ癒やされたことでしょう。楽しかった思い出も多反面、つらいことや悲しいこともたくさんありました。私のそばで一緒に笑ってくれたあやちゃんは、かけがえない友だちです。確かに彼女に対してムカついたときや、疑問を感じたこともありました。でも私は、カメラのレンズ越しにあやちゃんを見て、追いかけて、追ってみてはじめて、欠点やダメなことも含めて彼女の優しさに、私は支えられてきたんだなあと思いました。



◎ 柏木将宏(正則高等学校)

絵が得意だったり、物を作るのがうまかったりすると、ともすると、他人と比較したり他人をけなしたりする。しかし彼は決して他人を批判しない。彼が自分自身の世界を持っているからこそ、他人の作品を別のものとして見られるのだと思う。だからこそ、彼はいろいろなことを次々と吸収できるのだ。



◎ 大宮攻(愛知県立守山高等学校)

日を受けて学校をぼんやり眺めている彼の姿には、何とも言えないものがあつた。ファインダーをのぞいたときはゾクツとした。そして彼にこんな一面があつたのかと驚いた。写真はでき上がったものもいいが、撮影にもすごく意味がある。一人の人物を撮るには、その人の内面まで知る必要があり、その人を知りたい機会でもある。撮影とは大変な作業だと思った。



◎ 山本紗織(岐阜県立大垣桜高等学校)

服飾デザイン科の仲間の多くは、デザイナーやパタンナーなど服飾関係の仕事をするを夢見てがんばって勉強しています。みんな服がすきで好きなことを仕事にしようとそれぞれの目標をもっています。

『伝えたい私たちの素顔 The Way We Are 2000』発行

第4回高校生の生活フォトメッセージコンテストに寄せられた作品をまとめた冊子、『伝えたい私たちの素顔 The Way We Are 2000』A4判48ページ/総ルビが6月末に完成しました。入賞作品17点に加え、入賞作品以外からもできるだけ多くの写真や文章を掲載し、高校生たちの「今」が伝わるようにしました。コンテストの参加賞として配布するほか、アメリカ、オーストラリア、中国などの日本語教育の現場へ約2,000部を寄贈する予定です。

なお、入賞作品は、TJFのホームページ上(<http://www.tjf.or.jp/jp/ej/ej0001.htm>)にも掲載されています。

